



## 中野博之 専攻長から 「子どもから学ぶ教師に」

先日、東京で行われた研究会に参加した。その場で、ある授業について授業者自身が発表者となり報告を行っていた。この授業については私も参観をしていたので授業の様子は把握をしていた。発表者は、教師の発言と発表した子どもの発言の記録を基に自分の授業がいかに成果を挙げたのかを自画自賛していた。しかし、授業で発言をしなかった子どもたちがどれだけ困っていたのかを観察していた私には、その自画自賛に違和感を感じざるを得なかった。発言をしていない子どもたちの学びを授業中に授業者自身が把握することは難しい。しかし、それを差し引いても、発言しなかった（「発言できなかった」の方が正しいかもしれない）子どもの学びを読み解こうとしない発表者の姿勢には憤りを覚えた。大人げないと思いながらも、私が観察した子どもたちの様子を研究会で提示し、授業者の自画自賛に冷や水をかけるようなことをしてしまった。

平成29年版学習指導要領が告示され、主体的で対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が叫ばれている。これは、教師が問題を提示し、解き方を指示し教師の思いどおりの答えを子どもに出させて事足りりとしてきた授業観からの転換を求めている。この転換は、子どもたちが生きていくこれからの社会が、正解は一つではなく多様な解答がありどの解答を選択するのかは自分自身で判断をしなければならない社会であることに依拠している。このような社会においては、一人一人が主体的に問題解決に向き合うことが重要となり、また、解答そのものではなくその解答に至った論理過程が重要となる。これを授業改善の視点に置き換えれば、子どもが主体的に問題の解決に向き合うことを重視し、子どもが出した解答ではなくその解答に至った子どもの思考過程を重視することと言える。

こうした思考過程を重視した授業を進めるためには、教師は子どもから学ぶ姿勢を持たなければならない。子ども自身が問題に対峙し主体的に解決しようとする、子どもなりの多様な解決過程が授業の中で現れる。教師はそうした多様な過程を見取り、認め、肯定的に価値付けていく必要がある。授業の成果を左右する要因は、その日の子どもの精神状態、授業時の環境状況、教師のモチベーション等、不確実なものが多い。だからこそ、教師は一つ一つの授業で子どもが示した思考過程を肯定的に評価した上で、それをデータとして蓄積していくことが大切となる。これは、授業中に目立った発言や行動を示さなかった子どもに対しても同様である。

子どもを主体とした授業観は、子どもを放置することと同義ではない。むしろ、子どもが主体的に解決すべき問題と対峙するための工夫、自分で考え他者との対話を通して各教科領域の目標である深い学びへと子どもを導く工夫というかなり高度な授業力が要求される。正に子どもから学ぶ教師の専門性が発揮されるものであろう。教職大学院の院生は是非ともこうした専門性を身に付けるための努力をしてもらいたい。



## 各種研修会等に教職大学院の教員が出向きます（無料）

昨年度の第4号（2018.5.1発行）でもお知らせしましたが、青森県内の各学校（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等）の校内研や各種団体（各地区校長会、教頭会、各教科部会等）の研修会に教職大学院の教員の講師派遣（無料）が可能です。ミドルリーダー養成コースの院生の実習も兼ねて要請していただいた教員が院生とともに伺います。

学習指導や学力向上、生徒指導、安全教育、健康教育等の様々な課題において、講師等でお悩みの時に教職

大学院の教員を活用してみませんか？ **ただし、火曜日と木曜日に限ります。**各教員の講演や助言等の可能な分野についての詳細は、教職大学院のホームページに載せております。ホームページの「お知らせ」の部分をクリックしてください。

\*連絡先 弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻（教職大学院）  
担当教員 成田頼昭 0172-39-3405 直通（メールアドレス yo-narita@hirosaki-u.ac.jp）

## 教職大学院新任教員紹介

この4月に教職大学院に人事異動がありました。中妻雅彦教授、小寺弘幸准教授が退職をし、三戸延聖准教授が青森県教育庁教育次長へ、三浦智子准教授が山形大学教職大学院へ異動しました。そして、新たに中谷保美教授（青森市立堤小学校校長より）、大瀬幸治准教授（青森県立青森高校教頭より）を迎えました。2名の先生からのメッセージを載せます。

### 中 谷 保 美 教授



この3月に青森市立堤小学校校長を定年退職し、4月1日付けで本教職大学院に着任致しました中谷保美（なかややすみ）と申します。

教職大学院という言葉は、正直申し上げて、実習協力校の多い弘前市を除く学校現場では、まだまだなじみのない言葉ではないでしょうか。

また、従来の大学院といいますと、特定の分野の研究を深める場所という（私の勝手な）イメージが強かったのですが、本教職大学院は、学校

現場での指導・実践力の育成・向上を目指し、現職として学校に勤務する教員を対象とする「ミドルリーダー養成コース」、学部4年の課程を終えてストレートで進学する学生を対象とする「教育実践開発コース」のいずれにおいても、2年間の課程の中で、教育現場や教育関連施設での実習や演習に多くの時間を割いていることに大きな特徴があります。

院生の皆さんは、全員が青森県の教員になるとは限りませんが、互いに実践的に学び合い、切磋琢磨することで、我が青森県の教育の発展と児童生徒の育成に大きく寄与することは間違いないと信じております。微力ながら、私も、これまでの38年間の小学校や教育委員会での経験を生かし、精一杯努力して参りたいと思います。

### 大 瀬 幸 治 准教授



グローバル化や情報化、少子高齢化等の急激な社会構造や産業構造の変化に伴い、新しい時代を生きる子どもたちのために初等中等教育の果たす役割はますます重要になっています。教職大学院は学校や社会が直面している教育課題について、他と協働しながら理論と実践の両側面から分析・探究する中で自らを磨き、課題解決の糸口を探る場です。

私自身32年間高校に勤務し、数学教員として、管理職として教育に携わりながら、「なぜ学校で学ぶのか？」「学校の役割は何か？」という大きな問いに対する答えを模索してきました。しかし、その答えは人それぞれです。これからの時代は決まった答えのない様々な問いや課題に真正面からぶつかっていくことが求められています。青森県の教育を取り

巻く多くの課題に目を向けながら子どもたちの笑顔のために、学部卒院生や現職教員院生と一緒に学んで、考え、探究していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 実り多い院生と教員の懇談会

2019年2月22日（金）に院生と教員による懇談会が行われ、今後の教職大学院の在り方について検討しました。院生より「授業」、「実習」、「教員採用試験」、「各種報告会」、「生活」など様々な点について率直な意見が出され、その改善策を探ることができました。下記に主な内容を掲載いたします。

質問1 ゲストスピーカーを招聘する授業において聴講の機会が開かれ学びにつながった。その際、事前の情報提供が早めにあるとよい。

回答 聴講可能なゲストスピーカーについては案内する。

質問2 教員採用試験の日程を考慮して実習の日程を決定してほしい。他県の採用試験受験者もあり、他県の試験日程にも配慮してほしい。

回答 そもそも実習が教員採用試験に不利になる考えには立っていないことを前提に、試験を前にした時間的な負担の軽減という点で回答するならば、他県の採用試験の受験意志については指導教員と協議の上、早い段階で相談してほしい。

質問3 2年次の集中実習は、例えば5月頃に終わるなどの工夫はできないか。実習校での実習内容や先生方との交流、情報収集が、採用試験受験時に大いに役立った経験を踏まえると、採用試験前に実習を終えることの意義は大きい。また、単元での授業担当をすることを考えると、現行の夏休み明けの時期よりも、学習進度の差が少ない春先～夏にかけての時期の方が、実習生にとっては有意義な実習になる。これらの点を考慮して、前年度のうちに実習時期を計画してほしい。

回答 実習校と協議を重ね、工夫していく。

質問4 「学習成果報告書」の執筆に期待される意義や価値とは何であるのか。現場の先生方の教育実践に近付けることができるような知見の示し方が求められているように考えられ、どのようなところに主眼を置いて研究を進めるのがよいのか、今後さらに考えていく必要がある。

回答 学内学修や実習での学びを通して、現場の児童生徒や学校の実態に即して研究課題を設定し仮説形成、課題解決研究、課題解決検証を行ったことから得られた知見を研究的にまとめたのが、学習成果報告書となる。この過程を踏みながらまとめていくことが重要である。

質問5 大学で実施されるゼミ、ホームカミング・デーへの出席に際しては、勤務校への派遣願があると、学校側も都合がつけやすい。特に、土日や振替休業日に大学に出向く場合、その振替の手続をしなくてはならず、事務担当職員の負担が大きかった。

回答 派遣依頼などの事務手続きについて考慮したい。

質問6 ミドルリーダー養成コース2年生の場合、今年度は1月11日に「学習成果報告書」を提出できることが理想とされていたが、現実的には厳しく、1月25日あたりに大学への出校日を設けてほしかった。

回答 次の年度は1月25日頃を出校日としたいと考えている。

質問7 1年次報告会、中間報告会、最終報告会と、分科会における発表者の組合せが常に同じ4名であったため、一緒に学んだ他の院生の研究全体の発表を聞く機会がなかったのが残念であった。発表者を組み替えるなどの工夫や、最終報告会は全員の発表を聞くことができるような工夫があるとよい。

回答 いつも同じ院生が組まないように検討していきたい。また、M2の発表時には、M1が司会・進行を行うようにする。

質問8 新入生向けのガイダンスの充実や、係活動の充実を図り、学年を超えて日常的なニーズを充足できるような“タテ”のつながりを強化したい。

回答 院生会議を時間割上に示していきたい。



## 入学院生からのメッセージ

### 教育実践開発コース

### 戸 萌 里



私は、他大学から教職大学院に進学しました。大学で教職課程を履修していましたが、実力が不足しており、教員としての資質・能力を身に

付ける必要があると感じていました。また、その土台ともなる教育学について、深く学ぶことができることも進学を決めた理由です。

実際に授業が始まるとやるべきことが多く、想像以上の忙しさにめまぐるしい日々を送っています。授業でのミドルリーダー養成コースの先生方との話し合いでは、毎回書ききれないほどのたくさんの気付きがあり、自分の考えを深めたり、広げたりすることにつながっています。はじめは、不安を抱いていましたが、この環境で勉強できることは他にはないチャンスだと思い、今では、自分の不可能を打ち破っていこうという心意気です。

目の前の一つ一つの課題、実習から学びを得て、今後実践に結び付けることができるよう努めていきます。わからないことばかりで、ご迷惑をおかけいたしますが、2年間よろしくお願いいたします。

### 教育実践開発コース 金 田 宏 樹



昨年度、一年間、青森県内の高校で臨時講師をしておりまして。一年ぶりに学生に戻るわけですが、院生と教員の最初の顔合せの日に学食で昼

食を食べた時、学生に戻った実感が一気にわいてきました。新たに会う人々、新しい環境に対する期待と不安で気持ちが落ち着かない日々が続いています。しかし、前の学校で、私の背中を押してくださった先生方、別れを惜しんでくれた生徒や保護者の方々、そして応援してくれた家族の期待に応えるためにも精いっぱい頑張りたいと思います。また、私がこの教職大学院を志望した理由は、青森県で正規採用の先生になるためで



す。弘前大学教職大学院で青森県での教育の現状や課題をしっかりと勉強して、第一線で活躍できる教員になりたいと考えています。

### 教育実践開発コース 古 川 弘 基



学部4年生に上がる頃は、次年度春から教壇に立つつもりでいました。しかし、教育学の分野の講義を受け、優れた実践家の姿勢や授業

づくりを目の当たりにした時から次第に自分の持っている教師になるための実践力、教養・知識などに自信が持てなくなり、まだ学び足りないと思うようになりました。そんな時に、教職大学院への進学を考えるようになり、しばらくして進学を決意しました。

青森で生まれ、青森に育ち、青森で教員を志す身として、精一杯勉学に励み、子ども一人一人に寄りそう教師を目指したいと思います。実習が楽しくて教師を目指そうと思った部分もあるので、実習や授業、日頃の講義には持てるだけの全力をぶつけて精進したいと思います。よろしくお願いいたします。

### 教育実践開発コース 佐 藤 皓 一

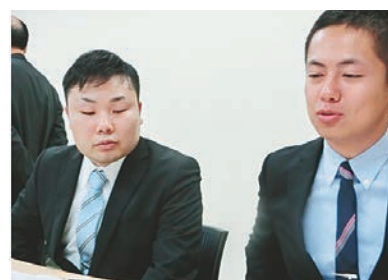


私は大学3年の時に教授に勧められ、その後4年次でこの大学院を受験し、入学しました。他大学からの入学のため不安なことも多いのです

が、期待の方が上回っているので楽しみでなりません。同学年の教育実践開発コースの院生11人で切磋琢磨し、研鑽に勤しみたいと思います。

教育を通して、生徒たちに様々なことを教えると同時に自分自身も高められるよう、この2年間でより多くのことを吸収し、学び取っていききたいと思います。実習では現場の空気や雰囲気を感じることができ、教員になってからも大いに役に立つと聞いています。この機会を大切にしていきます。

終わりにになりますが、これから関わる先生や先輩方、同学年の院生の皆さん、ご迷惑をかけるとありますが、2年間よろしくお願いいたします。



教育実践開発コース

須藤 大 貴



私は大学での実習を通して、自分には教師として必要な能力がまだ十分に身につけていないことを実感し、現場で働く前にもっと実習等で

経験を積み、様々な人と関わりながら成長していきたいと思い、教職大学院に入学しました。これから先、いろいろな苦勞や悩みを抱えていくと思うと、不安を感じる部分もありますが、どのような状況でもしっかりと物事に向き合い、最後までやり通すことで得られるものは多いと考えています。

教師は相手との関係づくりがとても重要な職業だと考えています。子どもに限らず、同僚の先生や保護者の方、地域の方々など、教師は多くの人との関わりがあります。私はそういった多くの人との関係作りを大切にしていきたいと思います。そして、大学時代にはできなかったことをこの2年の間に積極的に挑戦し、将来現場で働いていくときに生かしていきたいと考えています。

教育実践開発コース 蛸嶋 亮 介



東京都の大東文化大学外国語学部英語学科から参りました、蛸嶋亮介と申します。高等学校までを下北半島で過ごし、またこうして4年ぶり

に青森県で学びを行うことができ嬉しいです。

私は学部生として4年間、正しい発音で英語を教え、生徒の成長に対し真摯に向き合うことができる教員を目指しながら勉学に励んできました。また、教職大学院では実習の機会が充実していると伺っておりますので、それらを通して自らの研究テーマをより深めていくことができたと考えています。

まだ弘前大学に関して右も左も分からない未熟者ではありますが、これからの大学院生活において精一杯学びに励みたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。

教育実践開発コース 谷 垣 花



わたしは弘前大学教育学部での学びから、自分が理想とする養護教諭像の一つを、子どもがあのままの自分でいいという



自信をもてるよう働きかけていく人と考えています。また、これまでの多くの講義や実習から養護教諭は、学校や子ども

を支える柱の一本として重要な存在であると学びました。学部では同じ養護教諭を志す仲間と共に、養護教諭の職務や専門性について学び、深めていくことが中心でした。しかし、これからは多様な校種・教科の先生方や仲間と共に、学校教育を広く学ぶことが中心になると考えます。日々の学びの機会を逃さず、多くのことを吸収しながら成長できるよう努めていきます。

入学から数日たち、学びの環境が大きく変化したことに不安もありますが、同じ教育実践開発コースの仲間と協力し、切磋琢磨しながら頑張っていきたいと思います。2年間よろしくお願いします。

教育実践開発コース 成 田 伊 織



私は弘前大学理工学部在籍中に高校理科の教員免許を取得しましたが、現場で実際に自分が働くにはまだまだ力不足であると感じ、教職大

学院への入学を決めました。教職大学院に入学してからの毎日は、提出物や授業準備に追われ非常に忙しいですが、他の教育実践開発コースの院生の人たちやミドルリーダー養成コースの先生方から多くの刺激をもらいながら過ごしています。5月からはフィールド実習が始まり、今以上に忙しくなるとは思いますが、体調管理に気を付け、周りの人への感謝の気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思っています。

教育実践開発コース 藤 澤 麻衣子



教職大学院進学を決めた理由は、学部での学びをもう一步深め、実践力を高めたいと思ったからです。大学4年生の養護実習や卒業研究論

文執筆を通して、それまでに学んできた理論の意味がようやくつながり、養護学の深さに改めて魅了されました。同時に、様々な背景を抱える子どもの実

態を知り、子どもたちのために力を付けたいと思いました。

院生活が始まり2週間程経過しました。すでに実習もスタートし、ミドルリーダー養成コースの先生方、現場の先生方と意見交換をしながら、自分の視野が広がり、自分の見つけられていなかった課題を発見できていると感じています。学びは苦しい部分もありますが、じっくりと取り組み、分かった時や新しい気づきを得た時にはとてもうれしく感じます。大学院で学べること、自分にはない視点・経験を持つ院生の皆様、同じものに興味を持つ仲間との出会いと恵まれた環境に感謝し、2年間たくさん悩み、考え、挑戦しながら、しっかりと学びたいと思います。

#### 教育実践開発コース 山田 啓明



昨年度の学校サポーター実習で、自分なりに実践をし、その省察をした上で再び実践をする、というサイクルに非常に意義があると感じました。

一度は講師としてチャレンジしていくことも考えましたが、現場に出る前にもう少し実践と省察の中で自分を磨ける場を求め、この弘前大学教職大学院に入学しました。

4年間通い慣れたキャンパスではありますが、院生室には新しい仲間である教育実践開発コースの院生と、現場で経験を積まれているミドルリーダー養成コースの院生が一堂に会しています。また学部時代とは違う教職大学院の教員の方々もおられます。新しい環境に慣れるのにはまだ少し時間がかかるかもしれませんが、多くの人と共に学ぶことの喜びをかみしめつつ、邁進してまいります。

これから始まる2年間の学びの中で、自分の理想とする教師像を見据えた上で、時に同じ院生と切磋琢磨したり、教員の方々から助言を頂きながら、自分を高めていきたいと思っています。

#### 教育実践開発コース 米田 雄人



私は、青森県の小学校教員になることを目指しています。中でも、分かりやすく、かつ面白いと児童が感じられるような授業をしたいと考えて

おり、そのためには、自らの授業力を高めることが必要不可欠であると考えました。教職大学院に進学し、実践的な経験を多く積み、更に現場で働く教

員の皆様方との議論を通して、先輩方の考えや技術を盗みながら、私の授業力を向上させられればよいなと思います。教育実践開発コースでの2年間の学びを通して、私なりの授業スタイルや教育に対する考え方を少しでも確立できるようにしたいです。

この2年間に有意義なものにするために、身の回りのすべてが学びになるという意識を持って、何事にも全力で取り込んでいきたいと思っています。よろしくお願いします。



#### ミドルリーダー養成コース

##### 葛西 昌平 (藤崎町立明徳中学校教諭)



教職大学院を志望したのは、教員となって20年たったこの機会に、これまでとは違う視点から学校教育を眺めてみたいと思ったからです。教科

指導や学級経営はもとより多岐にわたる校務について先生方から教えをいただき取り組んできましたが、このまま目の前の仕事にだけ追われていてよいのかと不安も感じていた中で「教職大学院」の案内が目にとまり、未知の世界に飛び込むことに決めました。

大学院での毎日は、大学生であった頃の自分が何も気づかず・考えずに過ごしていたということを痛感しています。その一方で、一緒に入学したミドルリーダー養成コース・教育実践開発コースの院生から様々な話題を聞き、新しい見方や自分の知らない世界に気づくことができるのは、大きな刺激になっています。

大学院での学びは2年間ですが、特にこの1年間は勤務校を離れてのものになります。これまでの勤務から少し距離を置き、じっくり考えられる機会でもあるからこそ、自分自身がこれまで取り組んできた教育活動を見直し、この学びを、学区・地域や生徒に還元できるように努力したいと思っています。

### ミドルリーダー養成コース

木村 千穂（つがる市立木造中学校教諭）



教職大学院生としての生活がスタートし、2週間がたちました。当初は不安や緊張が大きかったのですが、親身になってくださる教授の先生

方や、前向きな院生の仲間のおかげで、楽しさを実感し始めている今日この頃です。さっそく講義・演習も始まっていますが、まず感じたことは「自分ひとりの視点を19人の視点に広げることができること」です。たくさんの意見を共有する中で、新しい気付きがいくつもあり、これが大学院の醍醐味の一つなのだと感じています。また、現場で実践してきたことを理論の視点に戻しながら整理できること、そしてその理論を、演習を通して体感できることも魅力だと感じています。この機会を与えてくださった多くの方々への感謝の気持ちを忘れず、一つ一つの学びを自分自身の成長につなげていきたいと思っています。

### ミドルリーダー養成コース

工藤 清和（青森県立八戸高等支援学校教諭）



弘前大学教育学部を卒業し、中学校や特別支援学校で臨時講師の経験を経て、青森県の特別支援学校の教員として採用されました。採用され

て10年経った今年、教職大学院で学ぶ機会が与えられたことにとても感謝しています。

大学を卒業した時から比べると、インターネットや情報端末の急速な普及など、子どもたちを取り巻く環境は急激に変化してきました。また、人工知能の普及により、将来なくなる仕事があると予想されています。こうした社会の急激な変化に対応するため、私たち教師も学び続ける必要があると考えています。

教職大学院に入学してから1か月がたとうとしています。自分の知識不足や考えの甘さ、語彙力や文章表現力の乏しさなどを痛感する毎日です。しかし、演習や実習の中で新しい学びや気付きが得られたときの喜びは格別です。この教職大学院で学んだことを所属校での実践に生かせるように、努力していきたいと思っています。

### ミドルリーダー養成コース

野呂 和也（青森県立青森東高等学校教諭）



勤務校を離れ、大学院生活も3週間がたとうとしています。すでに今まで経験したことがないペースで本を読み、レポートを作成しており、

今年1年で読解力と文章力は相当鍛えられるのではないかと感じています。これまで学校現場では多くの実践の中で、授業研究や分掌・担任の業務経験を積みましたが、今考えてみると、慌ただしい現場では一つ一つの課題を立ち止まって深く省察することができていなかったと思います。教職大学院では講義を通して理論を深めていきますが、学んだ理論と自分の経験を重ね合わせたとき、そこには合致する部分を感じながらも、新たな発想や気付きが得られることが分かりました。そしてこれは、自分の教育観にいい意味での「揺らぎ」をもたらしてくれています。大学院での学びと研究が学校現場に還元できるよう、自分自身にまだまだ伸び代があることを信じて、熱意ある仲間たちと共にこの2年間を頑張りたいと思います。

### ミドルリーダー養成コース

花田 美衣（三戸町立三戸中学校教諭）



今年度、弘前大学教職大学院で学ぶ貴重な機会をいただくことができました。まだ前期の講義や演習が始まったばかりなのにもかかわらず、

教員としての専門的な知識、省察力など、自分に足りないものがたくさんあることを痛感しているところです。しかし、ミドルリーダー養成コース院生は校種も教科も様々で、授業での演習だけでなく院生室での会話の中にもたくさんの発見があります。また、教育実践開発コース院生の皆さんからも多くの刺激をもらい、学ぶ楽しさを実感しています。新しい知識・理論を吸収し、これまでの学校現場での実践を振り返ることで自分自身を見つめ直してスキルアップしていきたいと



思います。

学校現場に戻ったときには、教職大学院で得たことを子どもたちへ還元できるよう積極的に研究を進めてまいります。

#### ミドルリーダー養成コース

原 田 正 樹（蓬田村立蓬田小学校教諭）



大学を卒業し、教員として現場で働き始めてから約20年が経過しようとしています。日々の業務に必死に喰らいつきながら、少しでも先輩

の先生方に近づけるようにと努力してきたつもりではいますが、理想には程遠く、まだまだ不甲斐ない自分に、苛立ちと不安のような気持ちを抱えています。

そのような中、教職大学院で学ぶ機会を与えていただきました。一緒に学ぶ教育実践開発コース院生からは、教師になったときにこんなことを頑張りたい。こんな教師になりたい。自分がなくしかけていた「教職への熱い夢と希望」をひしひしと感じさせてもらっています。また、校種の異なる同年代のミドルリーダー養成コース院生の先生方からは、現場での多くの実践や経験、自分では思いつかないような斬新な考え方や発想を毎日学ぶことができ、たくさんの刺激を受けています。

拙いながらもこれまでに自分が実践し積み上げてきた取組を大学の諸先生方の理論と結びつけながらたくさん省察し、自身を鍛えていきたいと思っています。そして、現場に戻った際に一つでも多くのことを還元できるように、積極的に学んでいきたいと思っています。

#### ミドルリーダー養成コース

平 田 貴 和（青森県立青森高等学校教諭）



これまでの21年間の教員生活において、お世話になった4つの勤務校でそれぞれ教員として貴重な経験を積んできました。ミドルリー

ダー養成コース院生としてのこれからの日々の中でも、同様に様々なものを吸収したいと考えています。異なる校種・教科の現職の先生方や、教育実践開発コース院生の皆さんとの協働の中で、よりよい教育活動の在り方について考えを深めていきたいです。

1年間、所属校にはご迷惑をおかけしますが、大

学院での時間を有効に活かし、今後役立つ経験を積み、現場に戻った際に青森県の教育に一層貢献できる教員になっていることを目指して日々努力していきます。

#### ミドルリーダー養成コース

宮 本 小百合（十和田市立北園小学校教諭）



弘前大学教職大学院に入学してから10日がたちました。新たな環境で頼もしい仲間とともに、学ぶ楽しさを実感している日々です。

今は、初めて目にする言葉や資料、文献によるインプット、演習によるアウトプットの授業についていだけで精一杯です。けれども、子どもたちの「生きる力」を育むために、私も主体的に、そしてミドルリーダー養成コース院生、教育実践開発コース院生と連携しながら授業に臨みたいと思っています。院生としての本分を忘れず、また教員としての経験を生かしながら、知識の幅を広げ、理論的な根拠に基づいた実践ができるよう真摯な気持ちで勉強に励んでいきます。

所属校の子どもたちや先生方、そして青森県の教育に還元するために、小・中・高・特支という校種を越えて学び合えることに感謝の気持ちを持ち、学び続ける教員でありたいです。

## 2020年度入学院生にかかる入試日程について

弘前大学大学院教育学研究科は、2020年度、教職大学院（専門職学位課程）の単独専攻となり、さらに教育現場の課題解決に向けて、高度な実践力・専門性を修得する場として、新たに生まれ変わる予定です。それにあたって現在、文部科学省に設置申請中のため、入試日程等がまだ決定されていません。詳しい日程等が決定し次第、このニュースレターの8号やホームページ等でお知らせさせていただきます。

#### 〈編集・発行〉

弘前大学大学院教育学研究科教職実践専攻  
（教職大学院）News Letter 第7号 2019.5.17発行  
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地  
Tel 0172-36-2111（代表）  
メールアドレス k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp  
HP 弘前大学教育学部（教職大学院をクリック）  
弘前大学教職大学院 入試フォローアップ部会